



F. S. Eringa. *Soendaas-Nederlands Woordenboek*. Dordrecht: Foris Publications Holland, for Koninklijk Instituut voor Taal-, Land-en Volkenkunde, Leiden, 1984. 846 p.

インドネシアの一言語であるスダ語は、ジャワ語に次ぐ大きな常用人口を有する言語であるにもかかわらず、これまであまり学問的に注目されることがなく、また学習書の不足から勉強することも難しい言語であった。本稿で扱う、フォコ・シーボルト・エーリンハ (Fokko Siebold Eringa, 1918~83)<sup>1)</sup> の辞書は、インドネシア独立後に出版された唯一の外国語によるスダ語辞書で、スダ語学習者及び研究者向きに出版されたものである。スダ語辞書は19世紀の半ば以降、語彙集やポケット版の辞書も含め何冊か出版されているが、ここでは代表的な9冊<sup>2)</sup>との比較において論じることとする。

- 1) 著者については、本辞書の序文及び、彼の蔵書の競売用に作製されたカタログ (Antiquariaat G. J. Bestebreurtje, Lichte Graad 2, P. O. Box 364, 3500 AJ, Utrecht, Netherlands) のはしがきを参照した。
- 2) ちなみに、この9冊のスダ語辞書を出版年順に並べると以下のようである。
  1. Wilde, A. De. *Nederduitsch-Maleisch en Soendasch Woordenboek*. Edited by T. Roorda. Amsterdam. 1841. 240 p.
  2. Rigg, J. *A Dictionary of the Sunda Language*. Verhandelingen van het Bataviaasch Genootschap voor Kunsten en Wetenschappen. 29. Batavia: Koninklijk Bataviaasch Genootschap van Kunsten en Wetenschappen. 1862. 537 p.
  3. Geerdink, A. *Soendaneesch-Hollandsch Woordenboek*. Batavia: H. M. Van Drop & Co. 1875. 444 p.
  4. Oosting, H. J. *Soendasch-Nederduitsch Woordenboek*. Batavia: OGILVIE & Co. 1879. 874 p.; Supplement. Amsterdam: Johannes Müller. 1882.
  5. Coolsma, S. *Soendaneesch-Hollandsch Woordenboek*. Tweede Druk. Leiden: A. W.

本辞書は、見出し語がおよそ3万語で、既存の辞書のうち最大の規模である。そのことは、序文に書かれているようにケルン (R. A. Kern) の未完成の辞書を基礎とし、コールスマ (Coolsma) の辞書とサチャディプラタ (Satjadibrata) の辞書の見出し語を完全に吸収した上で、自らが雑誌や小説で見つけた語彙とインドネシア滞在中 (1954年) に収集した語彙を加えていることによると考えられる。これらエーリンハ自身によって新しく加えられた語彙を分類すると以下のようになる。

- (1) 擬音語・擬態語 (例) *dalégdog*
- (2) 標準スダ語の母音が変化した語 (例) *dahas*
- (3) 標準スダ語の子音が変化した語 (例) *rurah*
- (4) 標準スダ語の省略形 (例) *dak*
- (5) インドネシア語がスダ語化した語 (例) *dahi*
- (6) 外来語及び新語 (例) *daléktur*
- (7) 口語 (例) *dalal*
- (8) 幼児語 (例) *emam*

上記のうち、特に(2)と(3)に属する語彙が数多く見出し語として採り入れられている。これらの語彙は、バンドゥン地方を中心に使われている標準

Sijthoff's Uitgevers-Maatschappij. 1913. 729p.; 1st ed. 1884. 424 p.; 第2版のリプリント 1930.

6. Lezer, L. A. *Lezer's Soendasch Woordenboek, Soendasch-Nederlandsch, Nederlandsch-Soendasch*. Bandung: Boekenverzendhuis L. A. Lezer. 1931. 350 p.
7. Satjadibrata, R. *Kamoes Soenda-Indonesia*. Tjetakan ke-II. Djakarta: Balai Poestaka. 1950. 414 p.; 1st ed. *Kamoes Soenda-Melajoe*. Djakarta: Gunseikanbu Kokumin Tosyokyoku (Balai Poestaka). 1944. 379 p.
8. Satjadibrata, R. *Kamus Basa Sunda*. Tjetakan ka 2. Djakarta: Perpustakaan Perguruan Kementerian P. P. dan K. 1954. 479 p.; 1st ed. *Kamoes Basa Soenda*. Djakarta: Balai Poestaka. 1948. 448 p.
9. Panitia Kamus Lembaga Basa & Sastra Sunda (LBSS). *Kamus Umum Basa Sunda*. Cetakan ke-5. Bandung: Tarate. 1985. 568 p.; 1st ed. 1980.

スンダ語の変種と考えるとよい。解説には、標準スンダ語が示されているので、どの語彙が変化したものかが明らかで、農村部などで遭遇する聞き慣れない語を確認するのに便利である。

既存のオランダ語辞書と同様に、本辞書も派生語（特に接辞のついた形の語）を詳しく載せている。サチャディブラタの辞書やスンダ言語文学協会 (Lembaga Basa & Sastra Sunda, 以下 LBSS) の辞書とは比較にならないほど、派生語、熟語等の数が多く、またその解説も詳しい。これは本辞書の最も優れている点である。しかし、残念なことに、例文や用例が皆無であり、文章の中でその語がどのように使われるのかが明らかでなく、この点ではサチャディブラタと LBSS の辞書の方が詳しく例文を載せていて優れている。これは本辞書だけでなく、既存のオランダ語辞書は総てそうであり、本辞書もその批判を免れない。なお、慣用句、言いまわし、諺については特に詳しくはないが、一般的、常識的なものは紹介している。

類義語や対語についてであるが、これも十分に示されておらず、サチャディブラタと LBSS の辞書の方がより詳しい。当然であるが、オランダ語で解説がなされるために、語義は正確に説明され得るが、別のスンダ語での説明がないために、学習者は他のスンダ語と関連づけて理解することができない。このことは、ある言語を別の言語で解説することについてまわる限界でもあり、サチャディブラタと LBSS の辞書以外のどの辞書も、語の持つ微妙なニュアンスまでは説明できず、スンダ語—スンダ語辞書に勝ることはできない。

さて次に、スンダ語に特徴的である敬語体系 (undak usuk basa)<sup>3)</sup> と動詞導入詞 (kecap pangantar pagawéan) を本辞書がどのように扱っているかを見る。

敬語体系はスンダ語だけでなく、ジャワ語等の他の地方語にもみられるもので、基本的にはスピーチ・レベルによって分類される語彙を入れ替えることによって成り立っている。その故に、語彙をいかに分類するかが重要であり、今日までコール

3) この点については、森山幹弘『スンダ語の敬語』(大阪外国語大学インドネシア語学科卒業論文、1985年)を参照されたい。

スマの5分類(非常に粗野な語 kasar pisan, 粗野な語<日常語> kasar, 中間語 sedeng, 敬語 lemes, 最高敬語 lemes pisan)が定説化している。これに対し、エーリンハはさらに細かく8分類している。すなわち、コールスマの言う中間語 (sedeng)<sup>4)</sup>を3分類して、謙讓語 (S: sedeng), 中間語 (P: panengah), 一般語 (S\*: sedeng\*)とし、また敬語 (lemes)を謙讓語として別の語彙を持つもの (I\*: lemes\*)と、別の語彙を持たず同じ語彙を謙讓語と尊敬語に使うもの (I: lemes)に二分している。

エーリンハの敬語の二分化及び謙讓語の設定は、既存の辞書にはなく、この辞書の優れている点の1つである。このことを例で示すと以下のようである。

	謙讓語彙	尊敬語彙
kirim (送る)	kintun (I)	kintun (I)
indit (出発する)	mios (s)	angkat (I*)

また、コールスマが sedeng (エーリンハの panengah と同一)として分類した語彙は極く少ないのであるが、エーリンハはこれをさらに二分しその一方を一般語 (sedeng\*)としているのは意味のないことのように思われる。

評者自身は、コールスマの sedeng (=エーリンハの panengah 及びエーリンハの sedeng\*)は、辞書で特に分類する必要はなく、例外として解説をつける程度で良いと考える。本辞書では、スピーチ・レベルを変えるために入替えを行う際の元となる日常語彙 (kasar)に詳細な語義の解説を行い、個々の尊敬語彙等には、該当する日常語彙を参照せよとのみ指示を与えている。特に尊敬語彙等に熟語や慣用句のある場合には解説を付けているものの、各々について例文が示されていないため、主語が替わった時にどの語彙を使うのが適切なかがわからない。

次に動詞導入詞 (kecap pangantar pagawéan)で

4) コールスマが sedeng (中間語)として分類しているものは、エーリンハの panengah (中間語)に相当するので、その用語に注意する必要がある。詳しくは、Coolsma, S., *Soendaneesche Spraakkunst*. Leiden: A. W. Sijthoff, 1904. pp. 32-34を参照のこと。

あるが、これはある動作を導く語で、普通はこの語の後に本動詞が置かれ、動作に微妙なニュアンスの違いを与えるものである。本辞書では、この語は「動詞的間投詞」(Werkwoordelijk Tussenwerpsel)として分類され、また「前置的」と解説されている。

(例) Kakara ogé *gék* geus *sor disuguhkeun*. 「腰を下ろすやいなや、もう、もてなされた。」

上の文で、動詞導入詞 *gék* は本動詞の *diuk* (座る) が省略されているが、「さっと座る」という意味を含んで使われている。もう1つの動詞導入詞 *sor* は「何か差し出される」意味を表す本動詞(ここでは *disuguhkeun*) を導き、「すぐさま…」の感じを与えている。

このように本動詞の省略がしばしば行われるため、既存の辞書が本動詞を示しているように、それぞれの動詞導入詞がどの動詞とペアで使われるのかを明示しておくべきであると考えるが、本辞書には本動詞が示されておらず、不親切である。

本辞書は、語の用法についてわかりにくいという欠点を持ってはいるが、ケルンの集めた語彙と、LBSSの辞書を除く8冊の辞書の一語一語について検討を行なった上で語義を丁寧に解説しており、現代スダ語辞書としては最良のものと言えよう。

(森山幹弘・Koninklijk Instituut voor Taal-, Land- en Volkenkunde, Leiden.)

J. D. Legge. *Intellectuals and Nationalism in Indonesia: A Study of the Following recruited by Sutan Sjahrir in Occupation Jakarta*. Monograph Series. Ithaca, New York: Cornell Modern Indonesia Project, 1988. ix+159 p.

I

スタン・シャフリル(1911~66)と彼が率いたインドネシア社会党(PSI: Partai Sosialis Indonesia)は、インドネシア政治史にユニークな位置をしめている。第1は、政党の基盤と党勢からみれば、その成立(1948年)から解党(1960年)に至るまで、弱小政党の一つであったにもかかわらず、多数の閣僚を出すなど「身の丈に余る」役割

を果たしたことである。第2は、PSIに参加したのがもっぱら高学歴の知識人であったので、この政党は政治集団である以上に、ある思想的モードを有するグループとして、国の内外に影響力をもったことである。党としての活動を停止してすでに28年も経つにもかかわらず、シャフリルなしPSI(系)という言葉は、今なお話題にされることが多い。

著者レッジは、このユニークな知識人の集団について、どういう評価を下すことが適当なのかという点を本書の課題としている。その背後には、現代史研究者の間でシャフリルとPSIについての評価が大きく分かれているという事情がある。とくに顕著なのは、ケーヒンとアンダーソンの評価の違いで、前者が独立直後のシャフリルの役割を重視するとともにその政治思想を高く評価した<sup>1)</sup>のに対し、後者はそれをほとんど意味のないものとし代わりに政敵タン・マラカと彼にしたがう「青年グループ」(ブムダ)を重視した。<sup>2)</sup>これに対して著者は、アンダーソンによって振られすぎた振り子を戻す、すなわちシャフリルらの意義を再評価する(9ページ)必要から本書を編んだと述べている。なお、著者はオーストラリア・モナシュ大学歴史学教授でインドネシア史専攻、著書にスカルノに関する平明な伝記<sup>3)</sup>や、インドネシア地域研究の入門書<sup>4)</sup>がある。

II

本書の目次は次の通りである。第1章序論、第2章インドネシアにおけるナショナリズムと知識人の役割、第3章占領下のジャカルタにおけるシャ

- 1) Kahin, George McT. *Nationalism and Revolution in Indonesia*. Ithaca: Cornell University Press, 1952.
- 2) Anderson, B. R. O'G. *Java in a Time of Revolution: Occupation and Resistance, 1944-6*. Ithaca: Cornell University Press, 1972.
- 3) Legge, J. D. *Sukarno: A Political Biography*. Sydney: Allen & Unwin, 1985.
- 4) Legge, J. D. *Indonesia*. Sydney: Prentice-Hall of Australia, 1977.

フリルサークルの形成，第4章新しいメンバーの横顔，第5章原則と可能性・シャフリルの政策，第6章結語。巻末に第3章と第4章に関連するメンバー45名の一覧が掲げられている。

以下に各章ごとに概要をみていこう。第1章では，先に述べたケーヒンとアンダーソンの評価の違いを示して，本書の執筆意図を明らかにする。この意図，つまり，シャフリルとそのグループ（シャフリル派）の役割を再評価するために，1948年のPSIに参加したメンバーをシャフリル派の中核メンバーとして，彼らの足跡をさかのぼる。その結果，独立以前の1931年12月に結成されたインドネシア民族教育協会（Club Pendidikan Nasional Indonesia, PNI-baru つまり「新PNI」と略称される）以来のメンバーと，日本軍政下のジャカルタで新たに参加したメンバーの二つのグループの存在が指摘される。以下の各章において，シャフリル自身の経歴とこの二つのグループの内容が明らかにされることになる。

第2章は，新PNIの成立と植民地政庁による弾圧等，独立以前のナショナリズムの状況をシャフリルの足跡を中心に述べる。新PNIはきわめて高い教育を受けた知的エリートのクラブであり，シャフリルはハッタとともにその中心的役割を果たしたのち，政庁の弾圧を受けて西イリアンとバンダネイラに流刑される。ここでは，併せて，インドネシアの知識人がどのように形成され，彼らがナショナリズムとどう関わったかについて，ていねいな整理が行われる。しかし，新しい資料や論点が提示されているわけではない。

第3章と第4章は，1942年から1945年にかけての日本軍政下のジャカルタで，流刑地から戻ったシャフリルの許へ出入りして，政治や社会の状況について自由に討論した人々及び1945年8月の独立直後にそこへ加わった人々が，PSIの中核を占めたことに注目して，彼らについてのプロフィールを描いている。ここが本書の中心である。著者は45名のメンバーを特定しているが，そのなかには，Andi Zainal Abidin, Takdir Alisjahbana, Chairil Anwar, Rosihan Anwar, Ali Budiardjo, Kemal Idris, Aboe Bakar Loebis, Mangunkusumo 兄弟 (Darmawan 及び Suyitno), Imam Slamet Santoso, Soebadio

Sastrosatomo, T. B. Simatupang, Murdianto, Maria Ulfah Soebadio, Dr. Sudarsono, Soedjatmoko, Daan Yahya ら，現在活躍中の者も含めて錚々たる知識人が含まれている。これらの人々について，インタビューその他で知りえた限りの情報（経歴，シャフリルとの関係から読書や趣味に至るまで）が丹念に記載されている。また，これとは別に，新PNI以来のメンバーで，軍政期以来シャフリルと提携しつつも，それとは別の人的ネットワークを作り上げた人物として，Djohan Sjahroezah に注目し，シャフリルと並ぶ重要人物として，その足跡を辿っている。ジョハン・シャフルザは，これまで研究者の間でもほとんど無名であっただけに，この部分は貴重である。

この時期に形成されたシャフリル派グループの特徴として著者は，(1)出身種族は多様であるがいずれも上層階層に属する，(2)植民地下で高度の教育を受け，とくに，スラバヤ (HBS) 及びジョクジャカルタ (AMS) のエリート高等学校の同窓生が多い，つまり，知的エリートのネットワークと重なっている，(3)それゆえ，オランダ語がもっとも近い言語であり，インドネシア語は成人後に学んで身に着けた言語である，(4)生活様式全般で西欧化され，サッカーやテニスを好み，外国語で広く小説を読み，広範囲にわたる社会科学関係の書物に目を通して，(5)それゆえ，植民地支配に抵抗し民族独立を希求する一方で，オランダを“respectful” (p. 81) とみなし，オランダへの留学は“巡礼” (p. 83) であった（ただし，それは独立後次第に幻想と化していく），(6)このような文化的にオランダ指向であることが，(西欧的)デモクラシーを信奉し，日本を反デモクラシーとして反日の立場に立たせる動機となる，点を挙げている。

第5章では独立後の政治過程におけるシャフリル派の動きが追跡される。ここでの著者の評価はケーヒンのシャフリル評価に近く，シャフリルが独立直後において，複数政党制を主張する一方大統領権限の制限をはかったことは，古い世代と対日協力者に反対する青年の希望を代弁するものであったこと，外交路線を推進した背景には，独立を達成するための醒めた現実認識があったことを指摘している。このシャフリルの現実主義は新

PNI以来の政治家としてのシャフリルの資質であったが、それが独立後の政治過程で存分に発揮された点も指摘される。これとともに、PSI結成に至る経緯——アミル・シャリフディンの率いたインドネシア社会党 (Parsi と略称) とシャフリルの率いた社会主義人民党 (Paras と略称) の合体 (1945年12月) から、Paras 系の脱退と PSI の結成 (48年2月) に至る政治過程——が整理される。そしてシャフリル派の現実主義 (反ラディカリズム) と大衆からの遊離性が、アミル派のポピュリズム、ラディカリズムとの対比において浮彫りにされる。

第5章は、新 PNI 以来のシャフリルグループの知的モードの一貫性が指摘されるとともに、PSI 自身が1950年代半ばには政党としての力を失い、そのメンバーの多くが、スジャトモコにおいて典型的にみられるように、“professional intellectual” (p. 131) として内外に知られるとともに、それぞれが“private life” (p. 132) に戻っていくありさまが記述される。

### III

本書はシャフリルグループの再評価を通して、インドネシア・ナショナリズムにおける西欧的知識人集団の成立と展開、その挫折の過程を描いている。著者はそのために、従来シャフリルだけに集中していた研究領域を、彼の個人的ネットワークへと広げ、その範囲で丹念に資料をつみ重ねて提示している。そこから知識人のさまざまな歩みがかがえる点で、本書は貴重な情報を提供している。インドネシア現代史の研究者だけでなく、植民地における知識人の役割に関心をもつ者にとって、一読されるべき研究書である。

しかし、他方で、インドネシアの知識人の問題を本書のようにシャフリルグループに限って解明するにせよ、なお追究されるべきことがらが残されているだろう。評者がもっとも関心をもつのは、

著者が新しい知見として提示したジョハングループの内容である。シャフリルとジョハンの二つのグループは重なり合いながらも別箇のネットワークを形成していたと指摘されているが、このジョハングループについて解明されるとすれば、PSI のもう一つの側面が明らかになると思われる。ジョハン自身が労組活動の指導者として、のちに全インドネシア労働者中央機構 (SOBSI) となる組合の結成に参加したとされており、ここでは、大衆的基盤に根ざす活動が認められるからである。PSI のこのような広がりの中に、例えば、タマン・シスワの PSI 系の指導者<sup>5)</sup>も位置づけられるのではないだろうか。本書はその点で、シャフリル周辺のインナーグループ及びジャカルタのメンバーに視野を限定しすぎているきらいがある。第2は、終章でも少し触れていることであるが、PSI 的な政治思想 (西欧的な個人の自立とデモクラシー、リベラリズムの追究) が、その後のことにスハルト体制下でもつ意義や役割についての解明である。シャフリルとそのグループは、〈知が力である〉ことへの全幅の信頼をもっていたといえよう。それが、普遍主義への確信 (知性によって普遍的真理に到達しようという確信) として、インドネシアの政治史・政治思想史上に、うねりのように現れたり消えたりしてきたといえよう。そのことを、学生、ジャーナリスト、作家、テクノクラート、教師等について具体的にみていくことは、当面著者の視野の外にあるとはいえ、たんに、現在のシャフリルと PSI の意義についてのみならず、インドネシアの知識人のあり方を考える上でも、きわめて重要な課題であろう。

(土屋健治・東南ア研)

5) 土屋健治「タマン・シスワとインドネシア現代政治——『9月30日事件』への対応をめぐって」『東南アジア研究』25巻3号、1987年。